

本とともに迷う

未知から既知へ、既知から未知へ

今福龍太

新たに遭遇すべき書物。それは、日常的効用からもっとも遠い世界にすむ住人だ。はじめから、なにかの用途や目的を満たすためにそこにいるのではない。一見、すぐにはなんの役にもたないといった風情で、ボロにも見える虹色の着物の裾をひらめかせて、地平線の彼方、砂漠か密林の方角をじっと見つめている。その異人の鮮烈な姿には、得体の知れない、何者かわけのわからない、謎めいた落ち着きがあつて、だから彼の前では、速度信仰と効率に追われる現代人の「忙しさ」という自己幻想がすぐにも暴露されてしまう。

古代人でもあり未来人でもありそうな、見慣れぬ、だが魅力的な表情で、書物は私たちを地平線の向こうへと情熱的に誘う。冒険を怖れて私たちがためらっていると、不意に、こんどは無然とおのれを閉ざしてしまふほどの偏屈さを見せることもある。燃え盛る焚火のように熱く、ときに行く手を閉ざす大石のように固い。この仙人に近づくには、少しばかりの覚悟と、自己放棄の潔さが必要だ。世俗の価値観から離れた、流動する砂の平原の起伏に自分を投げ出す冒険心と勇気とが。

役に立つ、便利だ、有用だ、経済的だ……。そんな安っぽい扇動的な言葉を、本の世界からきっぱりと放擲してしまおう。それらすべての形容をまとして、今年あたりから巷に登場しそうな液晶画面の付いた掌に乗る金属板なども、本ではない、と見破ろう。それらを使って「情報」を収集することは自由だ。だが、書物との遭遇によって与えられる真の啓示や発見は、情報記号の手軽な消費によつてではなく、私たちの身体まるごと、風や雨や砂嵐を受けながら、あの仙人が見つめる未知の荒野へと踏み込んでゆかねば手にはできない。

目的を定めぬ歩行。なもの遭遇するかわからない知の冒険。そう、まず本とともに迷うことだ。迷う意思を持つことだ。そのとき、一元化された社会の価値観から見れば否定的な混迷でしかない動きが、一気に創造的な「迷い」へと変わる。GPSで自分の居場所をたちどころに知る（＝知られる）ことから逃れ、裸になった世界のデイトールに迷い込み、自分自身の拠点をみずから創りなおす自由が生まれる。そもそも砂漠には道はない。踏み跡をつけるのはきみたち一人一人だ。効用性から離れた真摯な冒険心が、砂の上に小さな道を刻み、やがてそれは賑やかに荷物を積んだラクダの隊商を呼び寄せ、清冽なオアシスの泉を結ぶだろう。

そんな道なき道へと踏み出したきみのまゝに広がる、たとえばこんな仙人たちが指さす、こんな多様な砂の荒野。現実の、そして精神の砂漠が拡がる、厳格で、ゆるぎない、豊かな未踏地。T・E・ロレンス『砂漠の反乱』、J・M・G・ル・クレジオ『砂漠』、安部公房『砂の女』、エドモン・ジャベス『問いの書』、アティーク・ラヒーミー『灰と土』、エドワード・アビー『砂の楽園』……。アラビア、モロッコ、列島の片隅の砂丘、アフガニスタン、エジプト、そしてアメリカ・モハーヴェ砂漠……。人はそこで徹底的に元素的（エレメンタル）な世界の物質性に打たれながら、自らの命の再生を図り、知をもって世界へ挑むあらたな精神を準備する。オーストラリア内陸の赤い大地を彷徨ったブルース・チャトウインの、旅で得た啓示的な確信——ヒトの身体は、脳細胞から爪の先まで、イバラの藪や砂漠地帯をたえず移動する生活に合うように淘汰されてでき上がった（『ソングライン』）。そう、砂漠が人類の忘れられた身体的故郷であるのなら、書物は人間の知性の源泉が湧きだすもう一つの故郷なのだ。旅の涯て、この忘却されたふるさとの砂塵のなかで、まあたらしい未知が、深い既知とついに遭遇う。

きみたちの砂漠への果敢な一歩は、そんな知の連鎖を未来へと導くためにある。

外大生に すすめる本

この春、新たに外大生となったみなさん、すでにみずからの夢に向かって大学生活を送っている在学生のみなさんに、本学の先生方から推薦図書を送らせていただきました。これは、「未知」との出会いのためのブックガイドです。大きな可能性とエネルギーに満ちたみなさんが、じぶんの人生を変えてしまつてもいい、「本」と出会えますように。

*所属は2010年4月1日現在のもの。掲載は氏名の五十音順。(編集部)

石川博樹

(いしかわ ひろき)

アジア・アフリカ言語文化研究所助教 アフリカ史

外国文化に関心が深いであろう外大生のために、まずは石毛直道監修『世界の食文化(全二巻)』(農村漁村文化協会、二〇〇三〜〇九年)。このシリーズは世界各地で長年調査を行ってきた研究者たちが、各地域の食文化について情熱をこめて解説したものです。食文化の個性の豊かさに驚き、それらを生み出した人々への関心が高まることうけあいです。世界各地の料理を味わうことの出来る外語祭までに全巻読破しておきましょう。

二つ目は『世界の建築・街並みガイド』(エクスマレッジ、二〇〇三年)。現在のところ六巻刊行されているこのガイドブックでは、歴史的建造物から新進気鋭の建築家が設計した集合住宅に至るまで、建築史上重要な建物や街並みが色鮮やかな写真とともに解説されています。各地域の歴史や文化が色濃く反映されている建築については知識を深めれば、あなたの街歩きは必ず変わります。

最後はジョニー・シーガー『地図で見る世界の女性』(原民子/木村くに子訳、明石書店、二〇〇五年)。多岐にわたるテーマで世界の女性たちの現状を示した

地図帳です。ページをめくるたびに意外な発見があり、深く考えさせられます。世界各地の状況をより深く理解するための第一歩として、女性にも男性にも在学中に一度は手に取ってもらいたい良書です。

岩崎務

(いわさき つとむ)

総合国際学研究院教授 西洋古典文学・ラテン語

現代世界を考えると、その基本的な形を作り出した近代という時代を考えなければなりません。「近代」という問題

をとともに興味深く、しかしまったく違った視点から捉えた二冊の本を紹介いたします。

樋口覚『書物合戦』

集英社、二〇〇四年

読者を多くの書物に誘ってくれる本です。スウィフト論を介して漱石から第二次大戦中のオーウェルへ、そのオーウェルに「イギリスとインド」という問題で今度はE・M・フォースターが対比されという具合に、スウィフトの奇書『書物合戦』さながらに、さまざまな書物のつながりと戦いを描いて、書物のもつ不思議な磁力を感じさせてくれます。ラジオという新しいメディアの登場も交えつつ描き出される相関図には、とりわけ両世界大戦を経験した二十世紀の文学者たちの抱えた問題が新たな相貌で浮き彫りになります。

三浦雅士『身体の零度―何が近代を成立させたか』 講談社選書メチエ、一九九四年

著者は、「裸で何も塗らず、形を変えず、飾らない人間の身体を、標準的な人間の身体であると見なすようになったのは、きわめて後世の、一般的ではない文

化的成果」であるという観点から、身体という場に近代化の現われを探り出してゆきます。身体論を扱った本ということになります。さまざまな領域を横断して、文明と野蛮という問題を考えさせ、異文化を学ぶことになる外語大生に一読をすすめます。文学作品などからの豊富な引用も魅力です。

岩崎稔

(いわさき みのる)

総合国際学研究院教授 哲学・政治思想

若い人が海外旅行にでかけることが少なくなっているようだ。とくに、ちいさなバック旅行以外の旅をするひとが減っているという。一方で、歴史認識についてのセンスが怪しげになる傾向があり、もう一方でこんなふうに国境の向こう側について関心が後退してしまおうと、時間的にも空間的にもどんどん「わたし」へ「わたし」へと萎縮してしまおうのではないか、と思う。

それで、『旅』を内在したような本を三つ。テッサ・モリス・鈴木木の『辺境

から眺める―アイヌが経験する近代』(みずす書房、二〇〇〇年)は、近代日本の辺境であり、近代ロシアの辺境でもあるサハリンのアイヌのひとびとの歴史を、著者自身の旅の思考を織り合わせながら描き出した見事な作品。著者は、他の作品においてもつねに旅の名手である。

美信子の『棄郷ノート』(作品社、二〇〇〇年)は三つの旅を組み込んでいる。上海、韓国、満州の三つの場所は、それぞれが在日三世としての著者の内部で彼女自身を囁んでいるアイデンティティをめぐる痛みのある地でもある。植民地化された朝鮮の臨時政府があった場所、父祖の地、そして朝鮮族のひとびとの住む延吉への実際の旅は、歴史叙述と、かつて日本の支配に「おもねった」とされる作家の作品のなかの光景とが交わり合っており、奥行きのある物語になっている。



もうひとつは、わたし自身が昔翻訳した小品であるドウブラヴァ・ウグレシイチの『バルカン・ブルース』（未來社、一九九七年）。かつての多民族国家ユーゴスラビアが、民族主義者に掻き立てられたナショナリズムによって短期間に崩壊していく過程を、トランクひとつで亡命せざるをえなかった作家の視点から描いた悲しい断章からなる。彼女もまた、アムステルダムへ、ニューヨークへと旅しながら、移動とともに、その移動そのものを考えるひとであった。

あれっ、結局中心を離脱して思索する書き手は、みんな女性じゃないか。

受田宏之（うけだ ひろゆき）

総合国際学研究院准教授 ラテンアメリカ経済

- ① 宮本常一『忘れられた日本人』 岩波文庫、一九八四年
- ② イバン・イリイチ『生きる意味―「システム」―「責任」―「生命」への批判』 高島和哉訳、藤原書店、二〇〇五年
- ③ 宮崎学『突破者―戦後史の陰を駆け

クス』石崎晴己／東松秀雄訳 藤原書店、一九九七年

教育社会学の多岐にわたる分野について、複数の専門家が執筆している本です。教育社会学の概念について、詳しく説明してあります。また、初心者にも読みやすいように、図表やグラフなどを用いて解説してあります。教育社会学における一九八〇年代以降の新しい社会学的アプローチについて書いてあるのが特徴です。概念について分かり易く解説してある本は希少なので、興味のある方はぜひ一読してみてください。

恒吉僚子『人間形成の日米比較―かくれたカリキュラム』 中公新書、一九九二年

最近の日米比較教育の研究について取り上げられています。日本とアメリカのステレオタイプ的な見方を避けながら、個人と集団との関係のあり方という視点から日米両国の力関係や初等教育についての観察や細かい考察をしている本です。皆さんの中には、これからアメリカへの留学を考えている方もいらっしゃると思いますが、そういう方には特に、アメリカ

抜けた50年（上・下） 幻冬舎、一九九八年

ゆとりのない、せちがらいご時世だからこそ、主流に抗する道を選んだ著者を挙げてみました。民俗学者による①は、とり上げる対象はもちろん、話し言葉のように生き生きと綴られる文章も独特です。②は、現代文明に根源的な批判を投げかけてきた思想家の歩みが分かる便利な一冊となっています。キリスト教について考えるきっかけともなるでしょう。最も秀逸。③は、いまの日本でおそらく最も刺激的な論者のデビュー作です。

宇戸清治（うど せいじ）

総合国際学研究院教授 タイ文学・タイ映画論

カレル・ヴァン・ウオルフレン『日本／権力構造の謎』（上・下） 篠原勝訳、ハヤカワ文庫、一九九四年

昨年の本誌でも取り上げたが、本書はいまなお読み応えのある刺激的な日本分析である。二〇〇九年の政権交代による政治主導が、過去の日本権力構造を根本

カにおける教育の集団主義的な教育事例について書かれている箇所が興味深いでしょう。学校のあり方について、考えさせられる一冊です。

堀尾輝久『現代教育の思想と構造』

岩波同時代ライブラリー、一九九二年

現代教育思想について批判してある本です。ヨーロッパで成立した近代社会の一八世紀以降の構造転換について論じてあります。国民の教育権や子どもの学習権などの権利に注目し、それが戦後の教育史にどのように影響を与えたかということをもとめてあります。近代史における、教育思想の変化という大きな流れを理解するための要素がたくさん詰まった本です。

小川英文（おがわ ひでふみ）

総合国際学研究院教授 東南アジア考古学

苅谷剛彦『知的複眼思考法―誰でも持っている創造力のスイッチ』

講談社＋α文庫、二〇〇二年

的に作り変えることができるかどうか、それは日本に真の民主主義が根付くかどうかの試金石となるだろう。

丸山眞男『「文明論之概略」を読む』

（上・中・下）岩波新書、一九八六年

「文明論之概略」は、福沢諭吉の精神的気力と思索力がもつとも充実した時に書かれた、鋭い日本精神批判である。そこで看破された、変わることはない日本人のネーション度の低さの克服、国際的に通用する本物の思想の獲得は、グローバルリズムの波に洗われている現代の日本人にこそ必要とされていると言えよう。

岡田昭人（おかだ あきと）

総合国際学研究院准教授 比較・国際教育学

新入生みなさんに、教育学に興味を持っていただけるような書籍をご紹介します。

ピエール・ブルデュー『ホモ・アカデミ

浜田麻里／平尾得子／由井紀久子『大学生と留学生のための論文ワークブック』

くろしお出版、一九九七年

春には、大学に来て何を学ぶかについて悩んでいる人も多いと思う。そこで、「人生を変えた本」ではないが、先学からひとつ、アドバイスを送ろう。大学では論文やレポートをたくさん書かされる。はじめは何をどうすればいいのかかわからないが、そのうちなんとなくできてくるようになる。でもそれでは効率が悪いで、まずは上の苅谷剛彦を読んでもらって、つぎに実践篇として、ワークブックをやってもらおう。わたしの授業ではこれを一年生の一学期にやる。書くという行為が、そのうち自己表現の一種であることを理解し、実践できるようになる。そうすればしめたもので、何を学ぶかではなく、どう学べばいいのかに近づいたことになる。問題発見をめざす人文・社会科学では、明快な解答は望むべくもないが、宙吊の状態でも自分の感覚を信じて書き続ける勇気が望まれる。

金井光太郎 (かない こうたろう)

総合国際学研究院教授 西洋史学・アメリカ政治史

阿部謹也『自分のなかに歴史をよむ』

ちくま文庫、二〇〇七年

ドイツ中世史の泰斗が人文学、人間理解としての歴史学がどのような知であるかをわかりやすく説明したもの。歴史学とは、歴史を通じて人間がいかなる存在であるかを理解する学問であるという。現在と違った状況、思いも、人間の経験である以上、自分の中に共通することを見つけ、それを理解したとき自分が変容する営みであることを教えてくれる。

西崎文子『アメリカ外交とは何か―歴史の中の自画像』

岩波新書、二〇〇四年

副題の方が本書の内容を適切に表している。理念の共和国アメリカが近代世界の中でどのような自画像を形成していたか、その自画像を守って対外関係を構築してきたことを一九世紀初め以来現在まで通史的に明らかにする本である。理念と正義を掲げるアメリカが外に対して孤高を守る姿勢から、全世界で正義を実現

しようとする立場まで、その主張と批判とを紹介しながら、アメリカの世紀と呼ばれる現代世界秩序形成までの変容を跡づける。

アレクシス・ド・トクヴィル『アメリカのデモクラシー』(1・2巻各上下)

松本礼二訳、岩波文庫

二〇〇五年(1巻上下)、二〇〇八年(2巻上下) 一九世紀初めにアメリカ合衆国がデモクラシーを全面的に開花させていった時代に、フランス貴族のトクヴィルが合衆国北東部を視察して民主制の本質が平等と多数の独裁にあることを見据えて、そこから近代民主社会がどのような社会となり、民主制の可能性と危険性を論じた透徹した書である。現代のグローバル世界を根底から理解しようとするれば必読の文献である。



川口健一 (かわぐち けんいち)

総合国際学研究院教授 ベトナム文学

① 脇明子『物語が生きる力を育てる』

岩波書店、二〇〇八年

② 『科学朝日』編『モンゴロイドの道』

朝日新聞社、一九九五年

①は、大学で児童文学を講じている著者による「物語・読書」論。子供が成長過程において物語に接することの大切さを具体的な作品を通して説得的に語りかける。小さい頃の読書体験を振り返りながら読むというのを納得させられ、読書のもつ意味を改めて考える上で大変参考になる。

外大生に
すすめる本

②は、私たち日本人もその子孫であるモンゴロイドの何万年にもわたる移動・拡散の解明をめざした壮大な物語。アフリカの地に誕生した人類がアフリカを脱出し、その集団の一部がアジアに到達し、モンゴロイドを形成し、アジア各地へ、またさらにはシベリアを経てアメリカ大陸へ、また一方で海洋のオセアニア世界へと移動・拡散を繰り返す。本書は、その悠久のドラマの謎に最新諸科学の成果を取り込みながら迫ろうとする。日本人の成り立ちについての記述も斬新で興味深い。

久米順子 (くめ じゅんこ)

総合国際学研究院講師 スペイン文化・西洋美術史

私は大学時代から美術史学を勉強しています。といっても、よく勘違いされるのですが、私は画家ではありません(むしろ惨憺たる絵心の持ち主です)。美術史とは、端的に言えば美術作品について、あるいはそれを通して人間について考える学問です。

蒲生慶一 (がもう けいいち)

総合国際学研究院准教授 アメリカ経済論

① 内田義彦『読書と社会科学』

岩波新書、一九八五年

② 荻谷剛彦『知的複眼思考法―誰でも持っている創造力のスイッチ』

講談社 + a 文庫、二〇〇二年

③ アダム・ブランドンバーガー／バリー・ネイルバフ『ゲーム理論で勝つ経営―競争と協調のコーペティション戦略』

鳴津祐一／東田啓作訳

日経ビジネス人文庫、二〇〇三年

入手しやすさ、大学一年生でも読めるという基準で選びました。内田義彦さんの本①は、社会を見るとき、それをどのように見ていったらよいのか、そのために自前の「概念装置」をいかに作り、それを持つことがどんなに大切なのかを教えてくださいの本です。この本を読んで、研究することも面白いなあ和学生時代に感じました。荻谷剛彦さんの本②は、自前の「概念装置」とはいつでも、そう簡単に作れるわけではなく、なかなか自分

美術(史)関連の書物は山のようにありますが、皆さんには作品についての知識を集積するよりも前に、とにかくたくさん芸術に接して欲しいと思います。美術館や劇場に足を運び、学内でも空き時間に図書館で画集をめくったり映画を借りてみてください。

あ、ただし一冊だけ。美術に関心がなくても、とりわけ欧米圏の言語・文化を学ぶ人。ホール『西洋美術読事典』(新装版、高階秀爾訳、河出書房新社、二〇〇四年)は手元があると有用でしょう。文学・演劇・映画などに出てくる人名や小道具の意味を解説するのに役立ちます。

あとは私自身が大学時代に出会えてよかったと思っっている本から二冊。『狂気について―渡辺一夫評論選』(岩波文庫、一九九三年)。紛争やテロの耐えないこの世にあって、「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか」。ベイトソン『精神と自然―生きた世界の認識論』(普及版、佐藤良明訳、新思案社、二〇〇六年)。今、自分の目に映っている世界を別な風に見るためのヒントがたくさん詰まった本。

①リチャード・モリス『時間の矢』

(地人選書) 荒井喬訳、地人書館、一九八七年

②アレックス・ビレンケン『多世界宇宙の探検―ほかの宇宙を探し求めて』

林田陽子訳、日経B P社、二〇〇七年

③ジェニー・ランドルズ『タイムマシン 開発競争に挑んだ物理学者たち』

伊藤文英訳、日経B P社、二〇〇七年

「歳月人を待たず」「時は得難くして失い易し」など、時間を意識させる表現は多いし、皆さんも、これまで節目には「時間を大切に」など聞かされた言葉でしょう。大学生活が始まって、慌ただしい日々が続くと思いますが、時には時間を科学的に意識する時間を作ってみてはどうでしょうか。ところで、時間間隔と時間の流れは違い、意外にも時間を正確に計測する手段がないそうです。

①は、時間の捉え方の歴史を含めて、物理学がどのように時間を解釈しようとしたのかを平易に解説しています。母語

中謙二訳(全三巻、朝日選書、一九九六年)など。

東の『史記』とくれば、西の対抗馬はホメロス『イリアス』だろう。トロイ戦役を舞台にした血湧き肉躍る叙事詩だが、死の影が色濃く全編を覆っており、その鮮烈なイメージで多くの芸術作品を生みだしている。ギリシャの英雄アキレウスは、戦利品をめぐる総大将アガメムノンと不和になる。へそを曲げたアキレウスは戦列を離脱し、ギリシャ軍は苦戦を強いられる。アキレウスの親友パトロクロスは、友の甲冑を借りてトロイの総大将と戦うが……という本筋に、多彩な人物とエピソードが絡み、壮大な物語を織り上げている。

日本語で読むなら、呉茂一訳(上下、平凡社ライブラリー、二〇〇三年)または松平千秋訳(上下、岩波文庫、一九九二年)が入手しやすい。平凡社版の解説は、本学の元学部長、杏掛良彦氏。なお『イリアス』はトロイ戦役の一時期のみが対象なので、全体像が知りたければ松田治『トロイア戦争全史』(講談社学術文庫、二〇〇八年)がお勧め。



や専攻語の時間の前後関係の表現方法について再認識させられるかもしれません。②は、時間の始まりと終わりについて、そして今の世界(宇宙)がどのような経緯で成り立っているのかを(現代の科学成果に基づいて)教えてくれます。容易に読み進められるとは言えませんが、物事を抽象化したりする思考力の訓練になるでしょう。

この原稿を書いた後、「勧める本の紹介の仕方が悔やまれる」思いは、取り戻せない時間を表しています。③は、エピソードを中心にした平易な説明で、その後悔(いわゆる仮定法の表現)をひよつとしたら解消できるのではと楽しい想像をさせてくれます。未だ過ぎた時は変えられませんが、科学者のたゆまぬ努力を垣間見ることが出来ます。

最後に地域研究のユニークな傑作として、茂木健『バラッドの世界―ブリティッシュ・トラッドの系譜』(春秋社、一九九六年)を挙げておく。中世から現代まで姿を変えて歌い継がれる英国の民謡。その構造と背景を明らかにすることで、当時の社会が浮かびあがる。世界史の授業では断片的な知識にすぎないエンクロージャーや名譽革命、新大陸への移民といった事項が、歌の解説を通じて血の通った民衆の顔をもつようになる。今はネット動画で大半の曲が聞けるので、本書を片手に旋律と歌詞をたどるとよい。なおサイモンとガーファンクルで有名な「スカポローフェア」の分析は、ミステリー小説の種明かしのように鮮やか。この曲の歌詞は、昔の恋人に実現不可能な願いごとをするものだが、著者は「問答歌」として、その深層をえぐり出す。実はこの歌の願いごとには決して答えてはいけない、さもないければ恐ろしいことが起る。理由が知りたい人は、序章を読もう。

司馬遷『史記』は世代を越えた必読書。

まだ読んでいない人は、すぐ書店か図書館へダッシュだ! とはいえ、代表的な和訳だけでも岩波、徳間、ちくまが数巻にわたってずらり並び、解説本や小説版まで入ればアマゾンと書検索で八六件。正直どこから手をつけていいか途方にくれることもある。そんなときは「原文、読み下し文、注/解説」が収録されているものしよう。漢文は苦手と思つて躊躇する人もいるかもしれない。たしかに内容を知るためには小説やマンガの方が敷居は低い。しかし騙されたと思つて読んでみてほしい。現代人の感性で薄めた二次創作よりも、原文の方がすっきり分かりやすいと気づくであろう。簡潔な描写が繰り出す迫力は、一度読んだらやみつきになる。入手しやすいのは、小竹文夫ほか訳(全八巻、ちくま学芸文庫、一九九五年)、市川宏ほか訳(全八巻、徳間文庫、二〇〇五〜〇九年)、小川環樹訳(岩波文庫、一九八〇年)、田

篠原琢 (しのはら たく)

E・H・カー『歴史とは何か』

清水幾太郎訳、岩波新書、一九六二年

西川正雄『歴史学の醍醐味』

伊集院立ほか編、日本経済評論社、二〇一〇年

桂文楽『あばらかべっそん』

一九五七年(一九九二年、ちくま文庫に収録) 青蛙房

カーの『歴史とは何か』は、歴史を自覚的に考えようとする人、いままで歴史をただ単に過去のことだと考えていた人にはぜひ読んでいただきたい本です。歴史における「事実」とは何か、できごとの因果関係を説明することはできるか、そして歴史学は科学たりえるか、といった問いと格闘していくと、過去を振り返る営為がきわめて現在のものなのだということがわかります。歴史学に対するポストモダンの問いの多くは、すでにここに示されているといつていいでしょう。

西川正雄氏は、ヨーロッパ現代史研究をリードしてきた歴史家で、二年前に急逝されました。著者は、史料を徹底的に



柴田勝二 (しばた しょうじ)

総合国際学研究院教授 日本近代文学

世阿弥『風姿花伝』(岩波文庫など)

能の大成者である世阿弥が、演技や作能の心得を記した書だが、自己を他者に認めてもらうことがいかに難しいかを論じた書としても読むことができる。たとえば「離見の見」とは、他者の目によって自己の演技を見るという境地だが、要するにそれは独りよがりにならず、他者の立場に立って自己を表現するということである。社会に出ればそれがつねに求められるが、そういう姿勢を大学生の間に養っていただきたい。自己表現としての人生をいかに生きるかを極限まで見つけた古典である。

福沢諭吉『学問のすすめ』(岩波文庫など)

明治初年代のベストセラー。ここで説かれている「学問」とは机上で終わるものではなく、あくまでも現実世界を生き抜く手立てとしての「実学」である。その背後にあるものは西洋列強の帝国主義的な進出だが、過酷な経済競争に晒され、

鈴木茂 (すずき しげる)

総合国際学研究院教授 ブラジル史

学問が技術化され、知識が情報として断片化されつつある今日、大学での学びも、高校までと同様に、実践的な目的にかなった知識量を競うという傾向をますます強めているように感じます。こうした状況を考え直すための三冊です。

経済学史家の内田義彦は、平易な語り口で学生や一般市民に学問の意味を説き続けました。まずは「ことばと社会科学」(藤原書店、二〇〇〇年)をお勧めします。

杉田玄白『蘭学事始』(岩波書店、一九八二年)は、学問研究の醍醐味を伝えてくれるとともに、未知の世界に足を踏み入れる意欲をかき立ててくれる作品です。あえて外大生向けに付け加えれば、新しい言語の習得もまた創造的な学びであることを悟らせてくれるでしょう。

相馬保夫 (そうま やすお)

総合国際学研究院教授 ドイツ・ヨーロッパ近現代史

知らない街を歩くときよく方向を見失う。しまったと思っただけにはもう後の祭り、心は焦り右往左往するばかり。でも少し落ち着き、あたりを見回せば、街はふだんとは異なった相貌を呈してくる。あなたも異空間に迷い込んだようだ。ヴァルター・ベンヤミンの子どもの時代の迷宮への旅が思い起こされる(『ベルリンの幼年時代』ヴァルター・ベンヤミン著作集12、小寺昭次郎編、晶文社、一九七一年)。

人生の行く先を探しあぐねたときには、かえって見知らぬ土地をさまよるのがよい。チャールズ・ダーウィンは二歳の若さで航海に乗り出す。医学の道も神学の道もしつくりこず、迷いぬいた挙句である(『ビーグル号航海記』全三巻、島地威雄訳、岩波文庫、一九五九・六一一年)。

異空間への旅は時間の旅でもある。クロード・ランズマンは、ホロコーストの足跡を求めて様々な地を訪ね、生き残った者に話を聞き映画に撮った。時として酷な証言の映像から、表象、歴史、記憶、

ブラジルの教育学者パウロ・フレイレの『被抑圧者の教育学』(小沢有作ほか訳、亜紀書房、一九七九年)は、知識の詰め込みを「銀行型教育」と批判しました。目からウロコの商品です。

左右田直規 (そうだ なおき)

総合国際学研究院准教授 東南アジア政治社会史

阿部謹也『自分のなかに歴史をよむ』

ちくま文庫、二〇〇七年

いったい自分は何のために学んでいるのか。行きつまって訳がわからなくなつた時に立ち返る本のひとつです。ドイツ中世史研究の第一人者である著者が、自らの生い立ちや学問との出逢いを振り返りながら、自分にとって歴史を学ぶことにどんな意味があるのかを語ります。もともとは中高生向けに書かれた本ですが、大人になってから読んでも味わい深い作品です。

ミシェル・フーコー『監獄の誕生 監視と処罰』 田村俣訳、新潮社、一九七七年

語りについて、さまざまなイメージが喚起されてやまない(鶴岡哲/高橋哲哉編『シヨアー』の衝撃)未来社、一九九五年。

武田千香 (たけだ ちか)

総合国際学研究院准教授 プラジール文学

- ①ヘンリック・シエンキエヴィチ『クオ・ワディス』(全三巻)
木村彰一訳、岩波文庫、二〇〇七年
- ②トルストイ『アンナ・カレーニナ』
(全三巻) 木村浩訳、新潮文庫、一九九八年
- ③五味川純平『人間の条件』(全三巻)
岩波現代文庫、二〇〇五年

最近、長編小説を読むことが少なくなった。理由は時間や体力の限界など複合的なものだと思うが、ひとつ実感するのは、小説にどっぷりと浸れるだけの感性が若いときに比べて少なくなったような気がすることである。いつの間にか小説の世界に入り込み、時間が経つのも忘れて、眠気に襲われることもなく、気がついたら東の空が白んでいたという状況

ている針金に、なんの美しさも認めたくないし、自分たちの牢獄を美化しようとする人たちの仲間には、決してならないだろう。」

敦賀陽一郎 (つるが よういちろう)

総合国際学研究院教授 フランス語学

- ①エンゲルス『自然の弁証法』(上・下)
田辺振太郎訳、岩波文庫、一九五七年
(Friedrich ENGELS: *Dialektik der Natur*, 一八七三〜八二年)
- ②ポアンカレ『科学と仮説』
河野伊三郎訳、岩波文庫、一九三八年
(Henri POINCARÉ: *La Science et l'Hypothèse*, 一九〇二年)
- ③ラッセル『数理哲学序説』
平野智治訳、岩波文庫、一九五四年
(Bertrand RUSSELL: *Introduction to Mathematical Philosophy*, 一九二〇年)

人間と社会を含めた自然界の発展を全体的に観ていくと①のようになる。人間と人間社会の変化の根源には外界とのや

が今はほとんどない。スケールの大きい長編小説ほど若いときに読んでおくことをお勧めする。昔、夢中になり、いつの間にか物語の住人になっていた記憶のある小説を三点。いずれもストーリー性が高いから、きつとのめりこめるにちがいない。①の舞台はまだキリスト教が迫害されていた頃のローマ帝国。思いっきり時代をワープしてほしい。②は言わずと知れたトルストイの代表的長編。③のテーマは重い。戦争、人間、野望、国家個人等。いろいろな問題を考えてほしい。ちなみに著者は本学の卒業生だ。

立石博高 (たていし ひろたか)

総合国際学研究院教授 スペイン近代史

- クロード・モルガン『人間のしるし』
石川湧訳、岩波書店、一九五三年
 - クロード・モルガン『世界の重み』
石川湧訳、岩波書店、一九五三年
- 小説を書くということ、編むということ、刷るということ、配布するというこ

りとりがあるが、この関係を真正面から見据えた考察は多くない。「猿が人間に進化するにあたっての労働の役割」というような言及はどうだろう。エンゲルス(一八二〇〜九五)と同時代のダーウィン(一八〇九〜八二)とを対比すると興味深い。

②はフランスの数学者ポアンカレ(一八五四〜一九一二)の科学の基本的なについての思索。数式は使われていないのでじっくり読むと分る。人文・社会科学の研究者とは異なる文構成に注目。考え方は数学の門外漢にも通ずるところがある。例えば、次のような言葉。「数学の推理の本性は何であるか。それは普通、人が信じているように、ほんとに演繹的なものであるか。深く研究してみると、全くそうではないということがわかる。」

③は様々な分野で活躍しノーベル賞の文学賞まで受賞したラッセル(一八七二



と、そして読むということ、こうした「行動」が生命の危険をともなった時代が、半世紀ほど前にはヨーロッパにもあった(フアンズムの時代)。いかに生き、いかに死ぬべきかを、読者に必死に伝えようとした文学、それが当時の「アンガージュマンの文学」である。人間は自分を取り巻く世界のさまざまな状況に拘束される一方で、社会的存在としてその世界に主体的に働きかける責務を負うという考え方である。

このような小説が素朴すぎる、教条的である、と言ってしまうのは簡単だ。だが、私たちは依然として世界の重みにのしかかられているのだ。そうした世界と真剣に向き合うひとつの材料として、「アンガージュマンの文学」の傑作を読んでみたらどうだろう。モルガンのこの二冊は絶版だが、ともに数十刷を重ねており大概の図書館には備わっている。

『人間のしるし』には、ドイツの収容所に捕虜となったときのエピソードが語られる。ある男が、雪が凍りついた二重の金網をきれいだと言ったことに、主人公は反発する。「僕は、我われを閉じ込め

〜一九七〇)の数理論理哲学入門。記号も多少使われていて、文系(と思ひ込んでいる者)には難解だが、時間をかけて読むと分るように書かれている。複雑なものを厳密に(「まあまあ」ではなく)分析し、単純な要素に分けて行くと「数の概念にまで至る。それで、自然数とは、というあたりから話は始まる。」

三冊とも取っつきにくいかもしれないが、手ごたえはある。そして、第二、第三外国語でエンゲルス、ポアンカレ、ラッセルの母語もやってみよう!

鶴田知佳子 (つるた ちかこ)

総合国際学研究院教授 通訳・翻訳

- ダニツァ・セレスコヴィッチ『会議通訳者―国際会議における通訳』
ベルジュロ伊藤宏美訳、研究社、二〇〇九年

本書は著者の指導を直接受けた、フランスにおける日仏英通訳者が手掛けた邦訳で、まさに日本の通訳界待望の一冊と

いえる本です。

この本は現場の通訳者から広く共感を持って迎えられており、私自身、国際会議の同時通訳者や放送通訳者として活動していて、通訳現場で痛感することは、ただ単語の置き換えをしても通訳にはならないということ。これは通訳教育をしていても日々同じことを実感していて、「単なる言葉の置き換え」ではない、「意味を伝える」通訳をするためには、教えるためにはどうすれば良いのか、日々心を砕いています。

著者のセレスコヴィッチ女史が指摘しているのは、意味を伝えるという通訳の実態に必要な現場に基づいたアプローチで、まさに長年にわたるベテラン会議通訳者の経験と考察の集大成といえる本です。これから通訳に関心を持って学ぼうとする外大生に是非一読をお勧めします。

沼野恭子

(ぬまの きょうこ)

総合国際学研究院教授 ロシア文学・ロシア文化

① ドストエフスキー『罪と罰』

うしたもののひとつであろう。その中でも、「人種」と「民族」は、日常的に様々な局面でよく目にし、耳にする。そして、使用する者もいたって気軽に口にする分だけ、それらは多様な含意で用いられ、しかもその意味領域が留まるところを知らないほどに拡散し、一人歩きをする。ルース・ベネディクトといえは、日本では『菊と刀』が有名で、少し人類学に足を踏み入れた人ならば『文化の型』を思い浮かべることであろう。しかし、ここで紹介するのは、これらではなく、彼女の隠れた名著ともいえるべき『人種主義その批判的考察』である。

一九四〇年という、ナチス・ドイツによる「アーリア主義」が盛んに喧伝され、人種主義がヨーロッパを席卷する最中に書かれた本書は、そうした人種差別主義への挑戦として著された。当時、横行していた「民族」と「人種」の混用、つまり、後天的に獲得されたもの（文化）と遺伝的形質との混同を批判しつつ、「人種」についての科学的事実を明らかにした上で、人種差別主義は政治的動機から生まれ、「似非」科学によって正当化される

(1・2・3) 亀山郁夫訳

光文社古典新訳文庫、二〇〇八〜〇九年

② リュドミラ・ウリツカヤ『通訳ダイエール・シユタイン』(上・下)

前田和泉訳、新潮社、二〇〇九年

③ ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』

(世界文学全集105)

水野忠夫訳、河出書房新社、二〇〇八年

ロシア文学の醍醐味を味わうには、ぜひこの三冊！

①は、本学の亀山郁夫学長による『罪と罰』の斬新な新訳です。大学時代に一度はどっぷりドストエフスキーの世界に浸りたいものです。そこからどうやって這い出すかは皆さん次第。ラスコーリニコフと同じくサンクトペテルブルグをさまよひ歩いてほしいし、あなただけのソーニヤを見つけてほしいでしょう。

②は、現代ロシアを代表する実力作家ウリツカヤによる渾身の最新長編です。本学の前田和泉先生による見事な訳で読めるなんて、私たちはとても幸せです！絶望に満ちたこの世界で理想を捨てずに生きる主人公ダニエルの気高さに、必

ことを指摘する。もともと、『人種主義

その批判的考察』は、差別や偏見とは極力距離を置いたところから科学的・客観的に考察するという意味では、『菊と刀』や『文化の型』とも通底している。

一種の啓蒙書として著された本書の文章は極めて平易、その論理も明快である。とはいえ、本書の出版から七〇年ほどたった現在、「人種」に関しては、はるかに多くの事柄が議論されるようになり、人種主義に関する学問的水準にも隔世の感がある。ルース・ベネディクトの著書に啓発されて、更に先に進みたい読者には、当該問題の現在の地平を余すところなく集めた一書『人種概念の普遍性を問う』を紹介しておこう。本格的な学術書で、値段も少し高め(三八〇〇円)が、当該問題についての知的渴望を十分に癒してくれるであろう。

ふなだ 船田クラーセンさやか

総合国際学研究院准教授 アフリカ現代史

シュリーマン『古代への情熱—シュリー

ずや心を動かされるに違いありません。③は二十世紀ロシア文学の最高峰とも言われるブルガーコフの代表作です。しつかつめらしい顔で読む必要はありません。なにしろ抱腹絶倒のドタバタ喜劇と永遠のラブストーリーが組みあわさった最高に面白い小説なんですから。

八尾師誠

(はちおし まこと)

総合国際学研究院教授 イラン近現代史・イラン地域研究

R・ベネディクト『人種主義 その批判的考察』筒井清忠／寺岡伸悟／筒井清輝訳

名古屋大学出版会、一九九七年

竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う—西洋的パラダイムを超えて—』

人文書院、二〇〇五年

私たち自身、つまり人間、そして人間が作る社会についての知識や認識は、意外と不確かで、しかも、根の深いある種の思い込みにも左右されている場合が、思いのほか多いようである。私たち人間を集団として類別するさまざまな概念もそ

マン自伝』村田数之亮訳

岩波文庫、二〇〇七年

イシメール・ベア『戦場から生きのびて—ぼくは少年兵士だった—』忠平美幸訳

河出書房新社、二〇〇八年

大学に入学して、期待に胸ふくらませる皆さんは、どんな夢を持っているだろうか。そして、どんなことに情熱を感じているだろうか。

遙か三〇年近く前、考古学者になりたいたいと思っていた私がたまたま手に取ったのがこの『古代への情熱』であった。しかし、読み終わったときには考古学への憧れは消え去り、むしろ、人に笑われてもいい、大きな夢をもとう……と決意していた。そして少なくとも三言語以上は使えるようになろう、と。

知つてのとおり、著者シュリーマン(ドイツ、一八二二—一九〇〇)は、子どもの頃に親しんだギリシャ神話に描かれたトロイア戦争を実際にあつた話と信じ、その遺跡発掘を人生最大の目標に据え、極貧生活から一代で築きあげた私財を投げ打ってこの夢を実現した。シュリーマン

は、学校を中退した後、一日中働きながら、独学で、英語、フランス語、オランダ語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語……を次々と修得していった。各言語の習熟にかかった時間は、六週間程度だったという。

そのとき兵庫県の山奥で前思春期を送っていた私は、彼の弛まぬ努力と忍耐、夢を諦めない精神力、不可能を可能にする信念、そういったものに深く感銘を受けた。何事にもできない理由を探しがちな自分の甘さを反省させられた。人生の早い段階で、夢をもつこと自体を諦めていた私にとって、「夢の実現は自分の努力次第」というメッセージは、はかりしれないほど大きな意味をもった。そして、外国語を学ぶことは「おোগと」ではないとの示唆に、目が覚める思いであった。外大に入学した皆さんだから言いたい。大学での学びにおいては、単に自分の専攻語を修得することだけを目標とせず、それを使って「何を」実現するのかを悩みながら考えるべき、と。こんな時代だからこそ大きな夢をもち、その実現に情熱をもって取り組んでほしい。

しかし、皆さんは納得しないだろう。「夢を実現する」といっても、自分一人の力ではどうしようもない。理不尽なことも、人生においては多々起こる。今の不況だつて。いくら頑張っても、将来の見通しが立たないじゃないか、と。だからこそ、自分の意思とは関係なく、戦争に巻き込まれ、一二歳で兵士にされてしまったシエラ・レオネ出身のイシメールの本を手にとってほしい。希望を失わず「生きのびること」の絶望的な困難と意義を、そして自分と人間を信じ続けることとの決定的な重要性を、学ぶことができはずだから。

あのと、私が心に抱いた夢は今でも実現していない。自分の理解も努力もまだまだ十分ではない。けれども、あのとと同じ情熱をもって、「戦争のない世界の実現」を目指し続けたい。

松隈潤 (まつくま じゅん)

総合国際学研究院教授 国際法

ハンス・ケルゼン『法と国家』鶴飼信成訳

「回顧録」と言うべきものですが、中東

アフリカ、バルカン等、各地域における難民・国内避難民問題解決の難しさについても深く考えさせられる内容となっています。国際協力に関心を有する学生たちに推薦します。

峰岸真琴 (みねぎし まこと)

アジア・アフリカ言語文化研究所教授
言語基礎論 言語類型論

千野栄一『言語学フォーエバー』

大修館書店、二〇〇二年

本学言語学講座で教鞭を執られたことばの達人、故千野栄一教授の言語学への愛と洒落な息づかいを感じさせるエッセイ集。



東京大学出版会 (UP 選書37)、一九六九年
本書は法学に関心を有している学生たちに推薦します。本書は「純粋法学」の理論で著名なハンス・ケルゼンのハーバード・ロー・スクールにおける講義が基礎となっており、国際法を通じた平和の実現について考えるうえでも示唆に富んだ内容となっています。

犬養道子『人間の大地』

中央公論社、一九八三年

本書は開発途上国の問題や難民問題に関心を有している学生たちに推薦します。具体的な事例が豊富で、南北問題について考えさせられる内容であり、「開発教育」の教材としても用いることができると思います。推薦者自身も学生時代に本書を読んだことがひとつのきっかけとなり、一時期、NGOの職員として国際協力に携わっていました。

緒方貞子『紛争と難民―緒方貞子の回想』

集英社、二〇〇六年

本書は国連難民高等弁務官として十年間、難民支援の最前線で活躍した著者の

堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』

(岩波文庫ほか)

Ernest Hemingway "A Moveable Feast" (Arrow Books ほか)

日本の古典を読もう。前回は直球で『源氏物語』を薦めたが、今回は大方の学生ならば通読が可能な『方丈記』をあげる。全体で八千字程度であるが、古典を読んだ満足感は味わえる。できれば、この作品が做った慶滋保胤「池亭記」(『本朝文粹』所収)も読んでほしい。授業で取り上げても目頭が熱くなる漢文の名作である。中国の「記」が日本の風土の中で、漢文から和文的世界へと変貌する過程に触れることもできよう。

『風立ちぬ』は甘ったるい小説という評価もあるが、全くの誤読である。様々な読みが可能だが、ヨーロッパの文学から学んだものが、自分の世界として真に内在化して行くドラマとして読むことができると思う。そのように読んでみて欲しい。

外大生なら英語の小説も読もう。文庫で日本語訳(『移動祝祭日』)も手に入る

鴨長明『方丈記』 (角川ソフィア文庫ほか)

総合国際学研究院教授 日本古典文学

村尾誠一 (むらお せいいち)

ちくま学芸文庫、一九九八年
「音という形が意味を指し示す」言語の記号性を理解する手がかりとして。ノシュールの構造主義言語学を理解するには、手元にあるお金をしみじみと眺め、その記号性を考えてみることも役に立つかもしれない。情報の洪水はおカネでいえばハイパーインフレかな? もうやめておきましょう。

澤田昭夫『論文の書き方』
講談社学術文庫、一九七七年
優れた論文は優れた問いから生まれる。大学に入ったからには、少しでも良い論文を書きたいと考える若人にお勧めの古典です。ただし「言うは易く行うは難し」も真実。明晰な論文を書くことは研究者にとっても難しいことです。

岩井克人『貨幣論』

ちくま学芸文庫、一九九八年

「音という形が意味を指し示す」言語の記号性を理解する手がかりとして。ノシュールの構造主義言語学を理解するには、手元にあるお金をしみじみと眺め、その記号性を考えてみることも役に立つかもしれない。情報の洪水はおカネでいえばハイパーインフレかな? もうやめておきましょう。

が、原文の息づかいが絶品である。若くして海外に暮らす楽しさと苦さを味わえると思う。

柳原孝敦（やなぎはら たかあつ）

総合国際学研究院准教授 スペイン語文学 思想文化論

大学生にすすめるのは、ある程度長くて、適度に新しいけど、確実に古典として残るから（あるいはもう古典と呼んでいいから）読んだことがやがて意味を持つような本を読むこと。本学には多様な先生方がいらっしやって、多様な本をすすめてくださるだろうから、私が私の領分としてすすめられるもののうち、この条件にかなう三冊は、以下の通り。

ガブリエル・ガルシア・マルケス『百年の孤独』

鼓直訳、新潮社、二〇〇六年
先の条件を満たし、なおかつ楽しい小説としては、これにとどめをさす。

オルテガ『大衆の反逆』

桑名二博訳、白水Uブックス、二〇〇九年

の部分の音楽は、よくぞここまで感動的に作り上げたものだと思ってしまう。しかし、『ファウスト』、これは単純にすごいテキストだ（あたりまえだが）。実は、私は『ファウスト』を読む以前に音楽の方を熟知していたのだが、あの長『ファウスト』第一部・第二部を読みとおして、マーラーの八番で使われているテキストの箇所にとどり着いたとき、圧倒的な力でテキストが鳴り響いたのだった。あの音楽は、『ファウスト』のあの箇所にとどまるまでを積み上げているのだと初めてその時感じとった。

最後に取り上げたシェーンベルクの「ワルシャワの生き残り」は、演奏時間は七分ほどの短い作品。ワルシャワの強制収容所を生き延びた人が、その体験を回想して語るという構成になっている。中心となる語りの部分は英語、ドイツ人将校の言葉はドイツ語、そして最後にユダヤ人たちが自然発生的に歌いだす祈りの言葉はヘブライ語のテキストである。パウル・ツェラーンの詩「死のフーガ」をツェラーン自身が朗読した録音を聴く時もそうなのだが、この作品は何度

さらに条件を加えるなら、少し小難しい本も読んでみる、ということ。小難しいけど、わかれば、とりわけ若いある一時期には激しく共感できるはず。翻訳は各種あるので、他の訳でも良いけれども、本学の元教授の桑名先生に敬意を表して、この版をすすめるよう。

ロベルト・ボラーニョ『野生の探偵たち』

（上・下）

柳原孝敦／松本健三訳、白水社、二〇一〇年
4月発売予定。最後は自分の訳書の宣伝だけでも、これも間違いなく古典として読み継がれる小説。めっぼう面白い。

山口裕之

（やまぐち ひろゆき）

総合国際学研究院教授 ドイツ文学 思想 表象文化論

- ① J・S・バッハ「マタイ受難曲」
- ② グスタフ・マーラー 交響曲第8番「千人の交響曲」
- ③ アーノルド・シェーンベルク「ワルシャワの生き残り」

聴くても探かずにはいられない。

参考までに、私が特に気に入っている演奏をそれぞれ一つだけ紹介しておく。① J. S. Bach: Philippe Herreweghe/La Chapelle Royale, Collegium Vocale (一九八五年旧盤)、② Gustav Mahler: Claudio Abbado/Berliner Philharmoniker、③ Schoenberg: Pierre Boulez/BBC Symphony Orchestra, Günter Reich.

吉田ゆり子

（よしだ ゆりこ）

総合国際学研究院教授 日本近世史

日本のこと、日本人の心性を考えると、現代のことばかり見ていると解けない問題が多々あります。長い歴史の中で培われてきた日本の特質を説き明かす手がかりとなる本を選んでみました。新書や選書として手軽に読めるサイズにはなっていますが、中味はとて濃厚で専門性の高いものです。大学生になった皆さんに、ぜひ取り組んでいただきたい本です。

この企画からすれば変則的な推薦ということになるだろうが、テキストを伴う音楽を三つあげてみた。いずれも音楽の力が途方もないものであることに加え、強力な言葉の力をもつ作品である。

一つめにあげたバッハの「マタイ受難曲」は、ルター訳のマタイ福音書の第二六、二七章をテキストとする部分の他、アリアやコラールなどから成り立つ。人類の至宝とでもいふべき作品。ドイツ語を勉強する人であれば、この作品のドイツ語に触れながら全曲を聴くことは他のものに代え難い貴重な経験となるだろう（もちろん対訳でも）。

マーラーの交響曲第8番は、ラテン語の祈禱文「来たれ、創造主なる聖霊よ」をテキストとする第一部、そしてゲーテの『ファウスト』第二部（ドイツ語）の終わりの部分をテキストとする第二部から成り立つ巨大で長大な曲だが、ここではとくに『ファウスト』について言及したい。この壮大な交響曲は、『ファウスト』についての知識などなくても音楽だけで十分に感動的ともいえる。とくに『ファウスト』の最後におかれた「神秘の合唱」



勝俣鎮夫『一揆』

岩波新書、一九八二年

「一揆」と聞くと、百姓一揆を思い浮かべる方が多いでしょう。百姓一揆は「起こす」ものですが、この本でいう「一揆」は「結ぶ」ものです。ある目的のために連帯の心性を持つ人々が、一体化するための作法を行って結束した集団が「一揆」です。その作法とは、神社に一同が会し、連帯を神仏に誓った契約状（起請文）を焼き、その灰を神水にまぜ、一同がまわし飲みをします。これを「一味神水」といいます。この本は、そうした一揆の儀礼・作法、一揆の構造を述べながら、日本の歴史の基層に生き続けた集団心性を解明しようとしたものです。

山口啓二『鎖国と開国』

岩波書店、一九九三年

「鎖国」とは、一八〇一年に志筑忠雄『鎖国論』で初めて使われた言葉で、実際には江戸時代は自分の国の体制を鎖国体制とは呼んでいませんでした。実際、完全に国を閉ざしていたわけではなく、長崎・対馬・薩摩・松前の四つの口を通して世界と結びついていました。この体制は中国・朝鮮・琉球・安南など東アジアに共通の体制でした。ところが、資本主義世界市場に取り込もうとする欧米列強からみると、「公儀」が統括する独自の外交体制をとっており障害だとみられ、「開国」を要求されることとなります。この独自の社会体制を、地球世界的な視野から考えようとしたのが、この本です。江戸時代の研究を一段階高めたとても意義深いものです。

安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』

平凡社ライブラリー、一九九九年

「私が貧乏だとすれば、私が勤勉でないからだ」「私の家庭が不和であれば、私が不孝だからだ」と信じ、まるで困難な貧困は自分で解決できる、しなければならぬものと考えて努力してきまし

た。こうした人々を律していたのが、勤勉・儉約・孝行などの通俗道德といわれるものです。そして、通俗道德の上に構築されたのが、天皇制イデオロギーでした。このような社会通念の形成と展開を歴史的に解明し、近代日本社会の問題を考えたのが本書です。安丸良夫氏は、歴史を動かしてきた根源的な活動力は「民衆自身」であるとの立場から民衆的諸思想を取り上げ論述してゆきます。

和田忠彦

(わだ ただひこ)

副学長 総合国際学研究院教授
イタリヤ近現代文学・文化芸術論

四元康祐『四元康祐詩集』

現代詩文庫、二〇〇五年

アーサー・ビナード『釣り上げては』

思潮社、二〇〇〇年

多和田葉子『エクソフォニー―母語の外へ出る旅』

岩波書店、二〇〇三年

詩を読んでほしい。それも日本語の見え方もない風景を、いかにも軽やかに、

けっして力むことなく、わたしたちに見せてくれる、そんな詩を、たくさんでなく、いいから読んでほしい。

それは、日本語をいったん「外国語」としてながめなおしてみたらうえて、あらためて、たぶんとても雑種性の高い変形し歪みをかかえた「母語」として選びとったひとたちだけが紡ぎだすことのできることばの世界だ。ことばの主がアメリカ国籍であろうと、ミュンヘン在住であろうと関係ない。

じつは多和田葉子が「母語の外へ出る旅」と解きほぐしてもみせる「エクソフォニー」とよばれるこの現象は、いまではありふれた日常の光景になりつつある。そんなふうにして生まれる「あたらしい訛り」のなかに、きみたちがこれから出遭う未知の言語の世界への架け橋をみつめてほしい。

